
最後の奇跡を

ユユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の奇跡を

【Nコード】
N9901M

【作者名】
ユユ

【あらすじ】
江戸川コナン・・・組織の手によって超能力を手にいれてしまった。黒ずくめを捕まえる事は出来たが その代償は大きく 辛いものであった。
雨の降る病院の屋上で一つの小さな奇跡がおきる・・・そして二つの思いが一つになった。

これは 死ネタものです。ダメな方はbackしてください。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

苦しみは日を増すごとに 激しくなっていく・・・
助かる方法は 本当はないのだろうか・・・

周りの声が聞こえなくなっていくとともに 光さえもが 自分から
遠ざかり

そして・・・消えていった・・・

何も考える事が出来なくなり 自分の事だけで 精一杯であった。
意識が消えそうか消えないかの 狭間を何度も行ったり来たりして
いるせいか

ココがどこなのか 分からなくなってしまっている。

自分は本当に生きているのか？
死んでいるのか？
ただ 意識が戻っていないのか？

何も聞こえず 光もない。ただそれだけで 自分でも分からないほど
ど 怯えている。恐れている。

それでも・・・それでも 思いだせるものがある。
いままで 過ごしてきた記憶というものだ。

蘭・・・おっちゃん・・・博士・・・服部・・・それに あいつら・・・

少しずつではあるが 自然に思い出せれた。

あいつらの事を 思うと 苦しみが 軽くなったような気がする。
心が 純粹になれる。

真新しい真っ白な心になれる。

それだけが 唯一の心の支えとなった。

・・・分かっていて。そう・・・長くないと 言う事は・・・。
でも あいつらの顔を思い出すたびに もっと・・・もっと 一緒に
にいたいと心の底から思う。

願う。信じたい未来の事である。

なんでもいい。1分1秒でも長く共にいたいと・・・

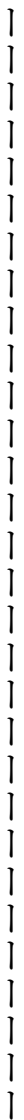
だが 自分は光を失ってしまったている。

自分の近くに誰かがいる事は 分かる。 分かっているつもりだ。

だけど それが 誰なのかちっとも分からない。

それだけで 自分は再び恐れを知ってしまう・・・

か弱い心になってしまった。



――

組織・・・いや 黒ずくめ。

そいつらが 俺をあそこから 遠ざけた。

江戸川コナンと 名乗っていても 前とは変らない。楽しい日々を 過ごせていた。

あいつらが・・・俺の正体を知るまでは・・・・・・・・

俺は 連れさらわれた。

あいつの姿を・・・目を・・・見た瞬間。

あいつは 銃を片手に・・・俺は まるで体が凍りづけにでもなつたかのように動く事も 身構える事さえも 出来なかった。

その場で 完全に 殺されると 察した。・・・思った。

気が付いたらどこか分らないところで 倒れていた。

実際には壁に寄りかかった状態で 後ろで手錠に掛けられていた。

口には布のようなものを巻かれていた。

手錠は 床から天井までの長方形の長い鉄の柱のようなものにながつていて 動く事も はずすこともできなかった。

そして 妙に体がだるく、苦しく、痛かった。

もし この手錠が鉄の柱につないで無かったら 俺はすぐにでも横に倒れてしまっていたかも知れない。

体を動かすだけで 苦しくなるし、痛みを感じていた。

そして もう1つ・・・

俺は とても長い間 眠っていたような気がする。

数時間・・・1日・・・いや もっともっと長く 想像もつかないほど 目が覚めていなかった気がする。

薄暗く 隙間風の音だけが聞こえる倉庫の中。

俺は再び意識を失いかけたのだろうか・・・いつの間にか 外からサイレンの音が聞こえてきた。

1台、2台、いやもっと多く・・・何十台ともいう 車の音と共に・

・

動く気力もなく うっすらと目を開けるだけ。

頭は完全に使い物にならなくなっていた。

扉をこじ開ける音が 雑に聞こえる。・・・相当 あせている証
拠だろう・・・

バンッと勢いがいい音が聞こえた。扉をこじ開けたか・・・
次に聞こえた音が 懐かしく思える・・・言葉の音だった。

消えゆく意識の中 この言葉だけは しっかりと 届いた。

？「工藤！！しっかりセエ！！」

？「コナン君！！しっかり！もうちょっとだから、頑張って！！」
返事を返す力もない。そのまま 意識は消えていった・・・

次に気がついたところは 病院の個室であった。

人口呼吸器をつけて ベットに寝ていた。

うっすらとした意識の中でおそらく 服部と赤井だろう 声が聞こえた。

2人は 俺が意識を取り戻した事には気づいてないらしく 話を進めている。

服部「それは 本当か？」

赤井「ああ・・・調べの中ではな」

服部「どうするんや？第1段階は終わってるみたいやけど それには 第2段階も必要なんやろ？」

赤井「なんだろうではない。必ずなんだ。FBIで 資料解読と研究がすすめられているが・・・期待はできないだろう」

服部「・・・解毒剤は 作れんのかいな？」

赤井「出来ない。黒ずくめにこんなにも 進歩した化学があったことが驚きだ。実際に言う・・・これは世間に公開しない方がいいだろう」

服部「・・・解毒剤もダメ、第2段階もできない・・・工藤はどうなるんや」

赤井「・・・それは もう分かっているんだろう?・・・副作用で
おそらく すべての光を失う。その代わりに超能力を 手に入れる。
だが、完璧ではない。・・・そう 長くはない。」

話の内容は 半分以上分からない事だらけ・・・ただ 分かった事・

俺は 死ぬのか・・・という事。

そのまま ゆっくりと 目を閉じる。

俺の苦しみは日を増すごとに激しくなってきたし、医者話で
も 長くは持たないと・・・

どうする事も・・・出来ない。そんな中 俺は窓の外を見ている事
が多くなった。

服部が壁に寄りかかり 俺を見守っている。

俺の息は いつもより荒くなっている。ときおり 苦しみが襲って
くる。・・・と いきなり 俺の体がぐらつと揺れ、倒れかけた。
そこを 服部があわてて支える。脈と呼吸が弱まってきている事は
体に触れるだけで 分かった。服部は俺を支えながら 手探りで
ナースコールを探しあてて何度も押した。

扉が勢いよく開くと医者と看護婦が入ってくる。その時にはもう
俺の意識は無かった。

しばらく経つと服部と和葉・蘭がいた。

3人はしばらく いたが屋上に移動した。服部と和葉ばかりがはな
し蘭はうなずいたりするだけであった。

次の日 あいにくの雨の日だった。

和葉に促されて蘭は病院に来た。何かと病院があわただしくなっ
ていた。和葉が服部を見つけ出し 事情を聞く。

服部「俺がちょっと目を離れた隙にくど・・・コナン君がいなくな
ったんや!!」

和葉「エエエ?!?!」

その話を隣で聞いていた蘭がいきなり 駆けだした。あわてて服部達も追いかけたが途中で見失ってしまった。

蘭が着た場所は 屋上だった。屋上に飛び出してしまったせいかな
転びそうになった。見渡すと真ん中あたりに子供が座り込んでいた。
蘭「コナン君?!」

そう叫ぶと 急いで自分がおっっていた カーディガンのコナンには
おらせる。

蘭「ダメでしょ! 病室をぬけだしたら。早くもどらなくちゃ」

蘭はコナンの体に手をまわして抱き上げようとした。

コナン「ゴメン・・・蘭・・・」

その言葉に動きが止まる。ゆっくりと蘭はコナンの体を抱いた。

コナン「最後・・・だから・・・蘭・・・姉ちゃんと いられるの
・・・だから・・・」

蘭「だめ!!! しゃべらないで!!! 蘭姉ちゃんなんて・・・呼ばない
で・・・新一」

最後の言葉にコナンは反応して 蘭の顔を見る。

蘭の目には涙があふれんばかりに出ていた。

コナン「・・・蘭」

蘭「もういいよ。無理しなくて。がまんしなくて。分かっている・・・
つもりだから・・・でも・・・でも私!? 私、ダメかな?・・・
ずっと一緒にいたつもりなのに・・・新一はずっと遠くにいるみた
いで・・・それが悲しくて・・・苦しくて・・・たまには 私の事
頼っていいんだよ!!!?・・・新一」

コナン「・・・ありがとう・・・蘭」

コナンは目を閉じる。

蘭「新一?」

コナン（赤井さんと服部の話だと 俺は光を失う代わりに超能力が
手に入る。実際ここまでこれたのも そのおかげ・・・今は・・・
蘭のために・・・もう一度・・・使いたい!!!）

コナンと蘭の周りの空気の重さが変わる。空気が静かに空へと上
って行く。病院の上にあった雨雲は遠ざかり 雨が一時的にやむ。
太陽の光が病院と蘭たちを包み込む。

その光景に見とれて 空を見上げていた蘭は 太陽と雲の間にある
大きくて美しい虹を見つけた。

蘭「虹・・・だ。」

蘭のほっぺを伝わり 涙が一粒流れ落ちた。

コナン「笑えよ。最後ぐらい・・・たまには・・・俺のために・・・
自分のために・・・俺は・・・蘭と過ごせた事が・・・一番楽しか
った。だから・・・」

続きを言おうとしていたコナンの口は ふさがれた。驚いたコナン
が目を開けると 目の前に蘭の顔が会った。

蘭「ありがとう、新一。これ、新一の力のおかげなんですよ？・・・
私も新一と過ごせた事が一番 楽しかったよ。ホントに・・・ホン
トに・・・」

蘭はあふれ出る涙を失しにこらえながら

蘭「新一・・・私・・・大好きだよ。愛してる・・・今も・・・こ
れからも・・・ずっと・・・永遠に!？」

コナン「・・・俺も・・・お前の事・・・愛している。」

コナンは幸せそうに蘭にほほ笑むとゆっくりとそのまぶたを閉じた。

やがて 太陽の光と虹は消え去り 再び雨が降り出した。その雨よ
りも 大粒の涙を流しながら、蘭はコナンの体を しっかりと抱き
しめ最後のキスをした。

~~~~~

しばらくして 服部達が屋上に来たが蘭の様子から 察したのか  
何もしゃべらなかつたし、誰も動かなかつた。

|||||  
|||  
お元気ですか？  
.....新一さま・コ  
ナン様。

あれからもう10年も経つんですね。私はまだ あなたの笑顔が浮かびます。

あなたを忘れることなど できません。あなたと過ごせた日々は私にとって かけがいのない時間でした。もう1度 あの頃に戻れたら・・・と 思う事があります。

でも私は 今を懸命に生きていこうと思います。あなたに教えてもらった事が 今の私を支えているのだから。私はあなたに 支えられ 私はきつと 誰かを支えている・・・。そう思うと 私の悩みなんて小さいものだと思えるから・・・勇気がでて もう1度頑張ろうと思えるから・・・。

ありがとう・・・新一

蘭より



## **(後書き)**

短編なのに 長くなってしまいました；。

話の詳しい内容は ご想像におまかせします。

短編初投稿なので よろしく願います。

感想よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9901m/>

---

最後の奇跡を

2010年10月9日04時44分発行